

インドネシアの大学における日本語教育インターンシップ —プログラムの開発と実践への第一歩—

高崎 三千代* パラストゥティ** ロニ** 稲葉 みどり***

*国際交流基金

**国立スラバヤ大学言語芸術学部

***日本語教育講座

Development of the Internship Program for Japanese-Language Teacher Education in Indonesia

Michiyo TAKASAKI*, PARASTUTI**, RONI** and Midori INABA***

*Japanese Language Department, The Japan Foundation, Tokyo 160-0004, Japan

**Department of Japanese Education, State University of Surabaya, Lidah Wetan Surabaya 60213, Indonesia

***Department of Teaching Japanese as a Foreign Language,
Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

愛知教育大学では、国際交流基金による平成27年度「海外日本語教育インターン派遣プログラム」により、教育学部日本語教育コース1年生1名をインターンとしてインドネシア国立スラバヤ大学へ派遣した。研修を充実したものにすため、双方の大学で連携して指導体制を組み、送り出しから現地での研修、事後の指導までの一連の過程を体系的に行えるような研修プログラムの開発と実践をめざした。プログラムは、「日本語教育研修（教育実習を含む）」「異文化体験」「国際交流・地域交流」の3本の柱を立てて作成した。本稿では、実施したインターン研修プログラム概要の紹介、教育実習の方法、カウンセリング、インターン学生のキャンパス内外での活動・体験に関する報告、プログラム運営面からの報告等を行い、プログラムの役割、成果、課題等を考察した。そして、送り出し側と受け入れ側の双方にメリットのあるプログラムの構築に向けて体制の整備を提案した。

Keywords：海外日本語教育実習, インターンシップ, 国際交流基金, 日本語教師, インドネシア

1. 研究の目的と背景

国際交流基金（以下、基金）による「海外日本語教育インターン派遣プログラム」は、日本語教員養成課程を有する日本国内の大学・大学院との連携により海外に学生を派遣して、日本語教育の研修を行うものである。派遣期間は、30日以上、半年以内で、主に海外の大学や日本語教育機関において研修を行う。

愛知教育大学では、平成27（2015）年度にこのプログラムの助成を受けて、日本語教育コースの学生1名を学術交流協定校であるインドネシア国立スラバヤ大学に1ヶ月間派遣した。インドネシアに基金からのインターンが派遣されるのは今年度が初めてで、派遣する側も受け入れる側もインターンのためのプログラム

の開発が必要になった。そこで、双方の大学で連携して指導体制を組み、送り出しから現地での研修、事後の指導までの一連の過程を体系的に行えるようなプログラムの開発と実践をめざした。

本稿では、ここで実施したインターン研修プログラム¹（以下、研修プログラム）概要の紹介、インターン学生²の日本語教育実習³、キャンパス内外での活動・体験の報告、プログラム運営面からの報告等を行い、最後にプログラムの成果、及び、実践を通して浮かび上がってきた問題点、課題等を考察する。

2. 先行研究・関連研究

才田(2005)は、大学院生に海外日本語教育インター

ンシップを経験させる狙いとして「母国や日本での日本語教育に特化しがちな大学院生の眼をそれとは異なる多様な日本語教育現場に向ける機会を提供することとしている。このように、近年では海外での日本語教育実習の経験が専攻学生のキャリア開拓に繋がる点が指摘されている。

早稲田大学国際学術院でも、「修了生のキャリアパスを可視化する出口保障プランとして、インターン派遣プログラムや派遣事業などの機会を有効に活用したい」として、インターンシップを学生の将来と大学の付加価値化に寄与するプログラムとして積極的に推進する動きを見せている。

お茶の水女子大学(2014)のオーストラリアでの教育実習報告書は、事前研修、実習、事後研修が実習学生自身によって詳細に報告されている。そこでは熟練教師の洗練された教授技術、学習者の学びのピークの違いへの驚き、言語の背景の文化への気づきが語られている。さらにそれらが送り出し側と受け入れ側両方の教員の指導と支援によって導かれたとして謝辞が述べられている。学習者ピークの違いや文化の気づきが特記されているのに対して、双方の教員の価値の異なりについての記述が見られないのは特筆すべき気づきがなかったのか一貫したものであったのかは不明である。

他に、キルギス、ベトナム、カナダなどでの海外日本語教育実習の報告もあるが、受け入れ機関側の非日本語母語話者教師による視点も加わった報告書は知る限りでは見つけることができなかった。

今回のインターンシップの特徴は、非母語話者教師が日本人学生をインターンとして受け入れることである。彼らのインターンシップについてのコンセプトと運営を記録し理解することは、派遣する側と受け入れる側双方にとって利益のあるインターンシップを開発し、ひいては海外日本語教育実習を持続性のあるものにするうえで重要であると思われる。

3. インターン研修プログラムの概要

3.1 目的・到達目標

本研修プログラムでは、「日本語教育研修(教育実習を含む)」「異文化体験」「国際交流・地域交流」の3本の柱を立てて、研修プログラムを作成した。

日本語教育研修においては、日本語授業等を見学し、教科書・教材、授業の進め方、学生の様子等を実際に見て知ることを目的とした。実習授業では、授業案作成、教壇実習、反省会等を通じて、実際に教える体験をし、日本語教育に親しむこと目標とした。

異文化体験においては、インドネシアの生活、伝統文化、イスラム教、ムスリムの生活等に触れ、自文化以外の文化について理解を深めることを目的とした。

国際交流は、現地の大学の学生との交流や地域の人々との交流を通じて、友好関係を築き、信頼関係を深めることをめざした。地域交流では、現地の教師会の方々、地域の人々との生活の中で交流し、考え方や習慣の違いなどを知ることを目的とした。

3.2 指導体制

インターン学生の派遣先は、インドネシア東部にある国立大学の日本語教育プログラムである。所属教員15名のうち日本語母語話者は基金派遣の日本語上級専門家⁴(以下、基金派遣専門家)1名で、14名は非日本語母語話者(インドネシア人)教員である。現地での指導は、プログラム長に指名されたインドネシア人日本語教員1名が担当者となり、インターン学生のホームステイも引き受けた。学科長と基金派遣専門家が担当教員をサポートしたほか、日本語の授業見学や諸活動で他の日本語教員や学生も協力した(5.1で詳述)。派遣前の指導、帰国後の指導、及び、現地研修状況の視察は、インターン学生の所属大学日本語教育講座の指導教員が行った。出発前から、連絡を取り合い、研修計画を立てた。

3.3 インターン学生と現地の生活(ホームステイ)

本年度インターン学生として派遣した学生は、愛知教育大学教育学部現代学芸課程日本語教育コースの1年生1名である。海外渡航経験は、1週間以内の短期海外研修、家族旅行だけである。日本語教育に関する経験はない。

インターン学生は、インターンシップ中、派遣先大学の担当教員の家庭に滞在した。机、ベッド、エアコン、インターネット等の設備のある部屋を借り、毎日そこから通学した。ホームステイを選んだのは、現地の家族は日本滞在経験があり、日本語が通じること、安全であること、通学に便利なこと、直接インドネシア人の生活に触れられる等の理由による。滞在实际費は納めている。

3.4 研修プログラムの構成

研修は以下の手順で実施した。

(1) 派遣前の指導

インドネシアでのインターン研修の紹介のため、指導教員が派遣先大学の情報提供、派遣先大学の学生が制作した日本語学科紹介の映像作品の視聴、研修プログラムの説明、事前レポートの作成と研修記録の書き方、旅行の準備、諸注意等を行った。

出発前には、国際交流センターによる危機管理、安全対策、旅と生活上の等の諸注意とアドバイスが行われた。

(2) 現地研修

現地到着後、派遣先大学の担当者により、学習、安

全、衛生等の生活上の諸注意等のオリエンテーションガイダンスが行われた。また、インターン学生との面談により、インターンシップの目標設定と計画策定が行われた。この研修プログラムの特色は、あらかじめ指導側が作成したプログラムを実施するのではなく、インターン学生と指導者が協議しながら、プログラムを更新して進めていく点である。

滞在中のプログラムには、日本語教育に関する研修、異文化体験、学生・地域交流等を含む、主に以下の内容が計画された。

- ①日本語の授業見学・参加
- ②学部の授業、他学科の授業見学・参加
- ③教育実習（マイクロティーチング・教壇実習等）、終了カウンセリング
- ④インターン学生によるプレゼンテーション
- ⑤キャンパス内での活動・体験（クラブ活動、学校行事等への参加等）
- ⑥キャンパス外での活動・体験（社会見学、市の日本語講座参観・高校教師会の集会参加、地域交流等
- ⑦定期的なカウンセリング
- ⑧振り返りと研修・実習記録の作成

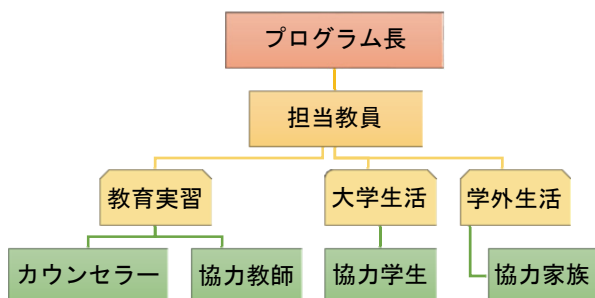
(3) 帰国後の指導

インターン学生はすぐに省察レポート（事後レポート）の作成をした。事前レポートで目標とした項目がどれくらい達成されたかを省察する内容を中心に自己評価し、研修の振り返り⁵を行った。

4. 現地研修（インターンシップ）

4.1 実施体制

本インターンシップは、日本語教育プログラム長に指名された担当教員が全体のスケジュールを立て、大学内外に協力を得て実施された。それを構造化したものが図1である。これを見ると、インターン中の生活は、教育実習、大学生生活、学外生活の3ドメインからなっていることが分かる。以下の節で、スケジュール作成の手順と3ドメインの各内容について紹介する。



【図1：インターンシップ構造図】

4.2 スケジュールの作成手順

まず担当教員は、インターン学生が教育実習を行う科目の時間割を基に、曜日ごとに主となる活動を決めた（表1：週間スケジュール）。続いて、現地滞在全期間のカレンダーに、インターン学生が参加できる派遣先大学内外の諸行事、および担当教員が準備した活動・体験を入れた。最終の1週間（第5週）にインターンシップの成果をまとめる活動を入れた。第4週から第5週にかけて派遣大学の指導教員が研修の視察に赴いた。

全体スケジュールでは、教壇実習か発表会を到達目標として必要な時間や相談回数を逆算して割り当てた。具体的にはインターン学生は1年生だったが、到着後に本人に確認すると教壇実習を行いたいということだったので、実習関連の相談を増やした。一方、今回はあまり関与する必要がなかった教員への周知を得ることと、帰国後の報告会に備えて小規模な発表会（「インターン学生によるプレゼンテーション」）を実施した。最後に、インターン学生が参加できる関連イベントがスケジュールに組み入れられた。

【表1：週間スケジュール】

曜日	主となる内容
月	日本語授業出席
火	日本語授業出席
水	クラブ活動（インドネシア文化体験）
木	家で自習・振り返り
金	日本語授業出席、カウンセリング
土	見学・小旅行（インドネシア文化体験）
日	見学・小旅行（インドネシア文化体験）

4.3 派遣先大学生の補助

担当教員の指示の下、学生会の役員が結成した3、4年生のチームが交代でインターン学生の生活を補助した。3年生は通学を送迎し、いっしょに昼食を取った。4年生は学外の活動に同行した。目的は、インターン学生の滞在中の安全確保と生活の世話をするだけでなく、現地学生が日本語によるコミュニケーションを経験することである。なお、2年生は教育実習でインターン学生と交流した。

4.4 ホームステイ家族の支援

現地オリエンテーションは、ホームステイ先である担当教員とその家族が担当した。起床から就寝までのインドネシア人家庭での作法や食事に関すること、交通手段の注意や簡単な買い物などである。水・生ものの注意と現地の主要な交通手段であるオートバイの後部座席の乗り方も教えられた。イベントがある場合は前日に必要な服装や作法が教えられた。

5. インターン学生の体験・活動報告

5.1 学部の授業見学・参加

ここでは、インターン学生がどのような研修活動を行ったか紹介する。内容は、インターン学生の実習記録や聞き取り、担当教員等から得た情報に基づく。ここでは、体験・研修の主なものを紹介するが、実際には、これ以外にも様々な体験があったことを付記する。

5.1.1 「インドネシア生活入門」

「インドネシア生活入門」は、インターン学生へのオリエンテーションである。講義2時間、体験6時間を設定した。インドネシアの生活、文化、宗教等の講義を聞いた後、意見を発表した。参考資料として、『インドネシア共和国文化観光庁資料』他を用意した。体験では、楽器、パティック、踊り等から選択した。

5.1.2 「異文化コミュニケーション」の授業出席

「異文化コミュニケーション」は、派遣先大学の学生を対象とした授業である。講義を聞いた後にインターン学生も意見を発表して、ディスカッションが行われた。

5.1.3 「社会言語学」の授業参加

「社会言語学」は、現地の3年生を対象とし、主に、日本語を社会言語学的観点から考察したり、分析したりする授業である。インターン学生は、授業に参加し、日本語母語話者として実際の日本語の事例を提供した。

5.1.4 日本語の授業の見学

日本語授業の見学は、日本語教育の研修の一環である。授業見学は、初級から中上級までのレベルを観察できるように計画した。また、文法、表記、読解、話し方、聞き方等の技能の指導が観察できるよう配慮した。見学した授業は、「初級表記」「中級読解」「中上級話し方」「中級日本語」「上級表記強化」等である。

インターン学生は、日本語母語話者として実際の場面を想定して、会話の相手をしたり、ロールプレイに加わったりした。また、日本語の事例も提供した。これらの活動は、日本人と接する機会の少ない現地の学生にとっては、日本の情報を収集したり、生の日本語に触れたりできる機会である。

授業見学後、授業担当者とともに、あるいは単独で振り返りを行い、気づいたこと、質疑等を行った。見学記録も作成した。4週間の間に様々なレベル、形態の授業を体験した。

5.2 教育実習

インターン学生は、主に2年生の科目で実習を行った。教壇実習を念頭に置いて、「初級表記」「中級日本語」「中級読解」の3科目の授業見学を3週間通して見



【図2：教壇実習風景】



【図3：実習反省会にて】

学した。見学に際して、科目によっては初回にインターン学生と現地学生に質疑応答をさせることがあったが、授業計画が大きく変更されることはなかった。

見学した3科目のうち「中級日本語」で50分の教壇実習を行った。「中級日本語」は『みんなの日本語Ⅱ』を主教材とする科目である。インターン学生が担当したのは第36課の「～ように、～します」「～ないように、～します」「～(できる)ようになりました」の文型導入と練習だった。

教壇実習までの助言・相談は、基金派遣専門家によって4回、約7時間実施された。内容は文型の分析、文型導入の方法、授業の流れ、教案作成、教材作成、シミュレーション等である。相談時のインターン学生の様子は「5.5 カウンセリングと教壇実習の準備」を参照されたい。

さらに、マイクロティーチングを行い、実際の教え方の練習を行った。研究授業が第5週に実施され、派遣大学の指導教員も現地に赴き、インターン学生の授業を参観した。その後、現地のインターン指導担当者と一緒に研究授業の反省会を実施した。

全体の総括として、翌日、基金派遣専門家により、録画ビデオを見ながら詳しい振り返りが約1時間に渡って行われた。図2は教壇実習、図3は反省会の様子である。

5.3 大学生活での体験・活動

5.3.1 学生会のクラブ参加

授業外でのキャンパスでの活動として、インターン学生は、書道、よさこい踊り、囲碁他から好きなクラ

ブを選んで参加することを推奨された。この活動を通じて、現地の学生との交流を深める狙いがある。インターン学生は、よさこい踊りに参加した。

5.3.2 文化祭参加

滞在期間中に、派遣先大学日本語教育プログラムの学生会が主催する文化祭「JPC (Japan Pop Culture)」が2日間催された。近隣の高校生が日本語弁論大会、漢字大会、朗読大会、書道大会、日本語クイズ、浴衣のファッションショー、カラオケ、ダンス、コスプレ等に参加し、腕前や能力を競った。お化け屋敷、日本食や小物等の屋台もあり、数千人の来場者で大いに盛り上がった。インターン学生は、現地学生と共に行事の準備や実行に加わった。当日は、ファッションショーとミスJPCの審査員を担当した。

5.3.3 インターン学生のプレゼンテーション

インターン学生は第5週の研究授業(教壇実習)の後にプレゼンテーションを実施した。テーマは、日本とインドネシアの文化比較である。インターン学生がインドネシアに来て気づいた日本との違いとその感想等を現地学生と教員に紹介した。派遣大学の指導教員も現地に赴き、その発表を聞いた。図4はプレゼンテーションの様子、図5は現地学生との記念写真である。

5.3.4 交流会

現地学生との交流は、大学生活の様々な面で行われた。その中でも帰国の前々日に開かれたさよならパー



【図4：インターン学生の発表の様子】



【図5：日本語専攻の学生・教員と一緒に】

ティは、インターン学生が一番心に残るものであったようである。2年生全員による企画で、クイズゲーム(日本語文を暗記する伝言ゲーム等)、パフォーマンス(歌やダンスの披露)、プレゼント(伝統的玩具等)、記念撮影が行われた。また、4年生との食事会やゲーム交流など、心のこもったもてなしを受けた。

5.4 学外生活での体験・地域交流

5.4.1 スラバヤ市の無料日本語講座見学

スラバヤ市が主催しスラバヤ日本国総領事館が協力している日本語講座「Rumah Bahasa (ルマー・バハサ：「言語の家」の意)」の授業を見学した。この講座は、2014年9月より始まり、市内の大学・日本語学校の教員等がボランティア(謝礼はパンと水)で教えている。

基金制作の教材『まるごと 日本のことばと文化』がスラバヤ市に寄贈され、派遣先大学の基金派遣専門家がシラバス作りと教え方講座を担当している(高崎, 2015)ことから、インターン学生はこの授業を訪れ、一般市民対象の日本語の授業の様子や『まるごと』を使った教え方を見学した。

5.4.2 高校日本語教師会東ジャワ支部の定例会見学

定例会には約70名の高校教員が参加した。内容は、州教育局主催研修会の出席者による研修内容の共有、高校合同文化祭の相談、基金の日本語パートナーズ⁶による日本文化のデモンストレーションだった。

派遣先大学は日本語教員養成系大学として30年以上の歴史があり、東ジャワ州内の高校教員はほとんど同校の出身者で占められる。活発に議論する教員の姿は現地学生が理想とする将来像であり、インターン学生にとっても興味深いものであったと思われる。またインドネシア人教員と並んで佇む日本語パートナーズの姿は、海外でのキャリア形成の一例として参考になったと考えられる。

5.4.3 東ジャワ州フェア (JATIM FAIR)

社会見学研修の一環として、毎年10月にGrand Cityのコンベンションホールで開催されるJATIM Fairに出かけた。Jatim (Jawa Timur)とは、東ジャワのことで、これは東ジャワ産業エキスポである。同州の物産展が主眼のフェアであったが、スラバヤ総領事館がブースを設置して生け花、書道などの日本文化紹介を行った。そのデモンストレーションには見物の人ばかりができ、現地の人々の日本への関心の高さを物語っていた。

海外で見る日本文化は、インターン学生にその再発見を促す効果があったと思われる。また、出展ブースには、東ジャワを拠点にする企業やメーカー、携帯電話会社などのブースもあり、インターン学生には、伝

統的な民芸品の他、インドシアの現代的な工業製品等を見る機会ともなった。

5.4.4 スラバヤ市内の見学

4年生の学生と一緒にスラバヤ市内見学をした。タバコ博物館、中華人街、アラブ人街、トロウラン遺跡など、スラバヤの名所や史跡を廻った。現地学生の案内によるスラバヤ市内の見学は、滞在中、数回にわたって行われた。また、ホームステイ先の家族とも出かける機会があった。

5.4.5 ホストファミリーとの家族との旅行

週末を利用して、ホストファミリーはインターン学生をスラバヤから約3時間離れたKampoeng Djawiという町へ連れて行った。都市から離れた山村で、伝統的な作りの家屋を見た。祈りの声、服装、マナーなどを身近に見学した。宿泊した家庭には、シャワーはなく、冷たい水をかぶる伝統的な方法であったので、普段の水シャワーよりもさらに冷たく感じたインターン学生は研修記録に書いている。

5.5 カウンセリングと教壇実習の準備

海外生活において母語で話せるカウンセリングは重要であると考えられるが、インターン学生が現地の大学や文化に適應することが望ましいと考え、日本人教員とのカウンセリングは週1回1時間だけ設定しておいた。ただし、日本人教員や他の教員・学生とのやり取りからその状態を把握するよう心掛けられた。

大学でのインターン学生は開始当初から落ち着いて見えた。第1回のカウンセリングでは毎日を新しい経験で楽しく送っていることが分かった。ホームステイ先では、口に合わない食べ物を強制されることがなく、比較的自由に任されていた。食べもの、睡眠時間、水シャワー、など一部慣れない習慣もあるが、「それはそれとして」受け止めているようだった。新鮮だったのは、派遣先大学の学生の学習スタイルが自分たちのそれと大きく違って、活発で自分から積極的に発言していることと述べた。学生は、インターンシップ開始すぐに「教壇実習を希望する」と表明したので、次週からの見学クラスを絞ってよく観察することを提案し、面談は約40分で終わった。

第2回も生活について懸案となる事項はないようだった。そこで話題を教壇実習に移し、以降カウンセリングの時間は実習の相談・準備の時間になった。

まず、実習科目とクラスを検討した。インターン学生は1年生で、まだ日本語教授法関連の専門科目を受講していないと聞いていたので、少なくとも50分の授業一コマを最後まで行えるだけの知識・情報を提供する必要があった。授業の進め方については、当該科目の使用教科書で想定されている文型積み上げ式と、

始めの多量のインプットから学習者のインテイク（発見・習得）を重視する第二言語習得理論援用の進め方の2例を説明した。教授項目の分析と教案の書き方の参考にするため、教師用指導書と日本語教育の参考書を貸与した。

数日後、教壇実習をするクラスの担当教員と3人で実習日時と担当箇所を決めた。インターン学生が口を固く結び、これまで見せなかった険しい表情になった。第一ドラフトを書いて二日後に相談する約束した。

約束の日に第一ドラフトは完成していなかった。手書きで何度も消した跡が残っていた。担当教員が厚意で貸してくれたパワーポイントを授業で使おうとすると、インターン学生のイメージする授業にならないようだった。パワーポイント使用は必須でないと告げ、自身がどのように教授項目を導入しようと考えているのかを中心にブレインストーミングを行った。

第3回のミーティングでは、学習者が文型の意味に気付くよう導入に工夫した第二ドラフトができあがっていた。半ばシミュレーションしながら、流れが説明された。用意された例文は「抹茶」「すし」など、現地学生の好む日本事情が取り込まれていた。

「前、できませんでした。たくさん練習しました。今できます。～ようになりました」と口頭で述べて文型を理解させようという案だったので、「前、できない」から「今、できる」の過程があることを視覚に訴えて直感で分かるように図を用意することを提案した。必要と思われる白紙や色ペン、クレヨン等を供与した。

実習前日に最終ドラフトで最後までシミュレーションを行い、例文が適切かどうかを相談した。ホワイトボードに貼る掲示物はまだ完成していなかった。パソコンで大きい文字で作成すれば簡単だが、インターン学生はクレヨンの手書きにこだわっているようだった。ホームステイ先の家族が、準備のためにインターン学生の就寝が遅いことを心配していた。

6. 現地研修運営側からの報告

6.1 インターン学生の受け入れの背景

2015年度に派遣先大学の日本語教育プログラムがインターン学生を受け入れた背景には、基金による日本語指導助手の派遣が2015年に終了して以降、学生と日本人と接する機会が少なくなるという懸念があった。2014年、基金の「インターン派遣プログラム」に応募して同年代の日本人学生を受け入れることが議論された。日本国内の学術交流協定締結校のうち、日本語教育コースを有する愛知教育大学に上記プログラムを打診したところ、当該日本語教育コースでも海外に日本語教育実習のできる機関を確保したいと考えていたこともあり、快諾が得られた。そこで、両大学で協力して「海外日本語教育インターン派遣プログラム」事業

に応募する運びとなった。

6.2 インターン学生の活用

一般にインターンシップは、インターン学生に実習を中心とする種々の体験を提供する機会と考えられる。このインターンシップでは、派遣先大学の学生の日本語学習、異文化交流、異文化理解等に有益であることも期待されていた。日本人の考え方や行動様式に触れるために、インターン学生にはより多くの現地学生との交流が期待された。

しかし、4週間という限られた時間の研修であったため、全てのクラスを平等に訪問することはできず、担当外の教員から「一部の科目だけ見学するのではなく、全体の教員の授業に参加してもらった役に立ってもらいたかった」という意見が出された。したがって、インターン学生の有効活用についてどのようにしていくかが次年度に向けての課題となった。

6.3 プログラム実施体制

インターン学生の帰国後、2回にわたって日本語教育プログラムでの議題となった。現地インターンシップがプログラム長の指名の下、担当教員ほか数名の教員と学生、担当教員の家族によって運営された点が指摘された。この点について学科長は「第1回でもあり教員全体に影響を及ぼさないように計画した」ことを明かしている。授業見学を許可した教員も自分の授業に関わる日程だけを把握しており、学科全体で研修の情報を共有し運営するという認識はまだあまりなされていなかった。

今回実施してみて、より多くの授業への参加が望まれていることが分かった。これは課題の一つであるが、学科全体を通じて受け入れることがインターンシップの今後の展望につながることを示したものとも考えられた。

6.4 担当教員等の負担

次回、インターンシップを受け入れる際の要望・条件についても見解がまとめられた。

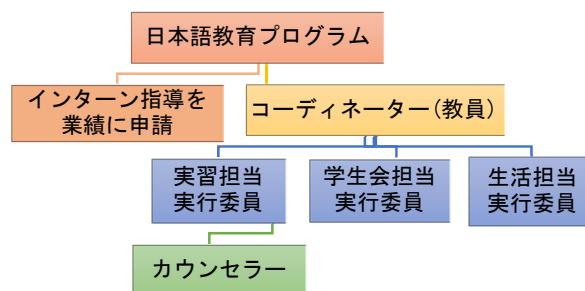
指導（研修）内容については、「本インターンシップはインターン学生にとって単位取得の正規科目であり、派遣先大学は場を提供するに留まらず、教壇実習に向けて指導することが期待されている」との示唆があった。よって、本格的な実習指導に向けてプログラムを開発していく必要性が提示された。

一方でインターン学生のスケジュール作成や指導は負担のかかる業務である。その負担については、実習を担当する教員が大学事務局に社会活動の業績として届け出ることが提案された。

プログラム運営上は、送り出し大学と派遣先大学の間でも、より綿密な打ち合わせや情報の共有が必要で

あることが分かった。例えば、食の安全については両者で共通理解が取れていたが、交通の安全面は意識の差があった。安全は基本的ニーズであり、送り出し大学の要望する安全対策を尊重する必要がある。

まだ研修中のインターン学生であっても、海外では日本語母語話者として貢献できる。今後のインターンシップでは多くの教員と学生がこの機会を享受できるよう、実行委員制にしてコーディネーターがインターンシップをまとめ、日本語教育プログラムで情報を共有することが提案された。以下の図6は、今後のインターンシップ運営の構造をイメージしたものである。



【図6：次回インターンシップ構造図（案）】

7. 研修プログラム実践の総括

インターン学生の所属大学と派遣先大学が協力してプログラムを作成して実践するのは、今回が初めてであった。ここでは、この実践を通じて得られた知見、成果、課題等を考察する。

まず、研修プログラムの目標とした「日本語教育研修（教育実習を含む）」「異文化体験」「国際交流・地域交流」が達成されたかどうかを考える。

日本語教育研修については、インターン学生は授業見学、教壇実習等により、教え方の初歩的な知識を身につけることができたと考えられる。指導者側は、きめ細かな指導により、インターン学生のイメージする授業についてその方向を助ける指導ができたと言える。また、地域の日本語教室の見学、高校教師会の集まり等に参加し、海外の日本語教育事情を知る機会を提供できた。

異文化体験については、大学生活、クラブ活動、ホームステイ先での日常の体験、小旅行等を通じて、自文化とは異なる習慣や考え方に触れることができたと思われる。

国際交流に関しては、授業、クラブ、行事参加等を通じて現地学生との交流が活発に行われた。また、地域の日本語教室見学、日本語会話の相手、田舎への小旅行では近隣の人々と触れ合う機会があり、限られた期間内でできる限りの目的は達成されたと考えられる。

次に派遣先大学の学生にとって利益があったかどうかを考察する。インターン学生の受け入れの背景に

は、現地学生が日本人と接す機会を増やし、日本語を使う機会を設けたいという意図があった。学生に経験を積ませるインターンシップであっても、日本語母語話者として派遣先大学に貢献してもらいたいという考えがあることが明確になった。すなわち、インターンシップは、インターン学生の教育や体験のためだけでなく、派遣先大学の学生にも日本語学習、異文化交流、異文化理解等の観点から、利益を供与することが期待されているのである。

今回のインターン学生の活動や行動から、学生であっても現地学生へ貢献できることが分かったが、前述のように、全てのクラスを平等に訪問することはできず、インターン学生の有効活用の方法が課題となった。

一方、異文化理解については、インターン学生側だけでなく、交流を通じて双方の学生が違いを知り、体験を共有できたと考えられる。インターン学生は、日本語教育専攻の現地学生と同じ目標を持っており、よい刺激になったと思われる。特に、現地語を使用できる非母語話者教師とそうでない教員では、初級の教授方法等が大きく異なることを認識するきっかけとなったと思われる。

ただし、これらの考察はあくまで両大学の教員の観察にすぎないので、このプログラムがインターン学生や現地学生にどのような教育的効果があったかを明らかにするには、さらなる研究が必要である。

8. 展望

このインターンシップの実施によるもう一つの成果は、学生間の交流だけでなく、教員間の交流が一層深まったことである。インターン学生の所属大学と派遣先大学の教員は、協力体制を組んでプログラム開発に臨んだ。これまで学術交流協定校として学長一行等が行き来をすることはあったが、現場の教員間で協力して日本語教育に取り組むことはなかった。今回は基金派遣専門家による支援も加わって、日本語教員養成のためのより専門的なプログラムの開発に向けた学術研究交流が推進されたと思われる。

謝 辞

本研究は2015年度国際交流基金による日本語教育インターン派遣制度の助成を受けて実施の運びとなりました。研修プログラムの実施におきましては、国立スラバヤ大学言語芸術学部日本語教育プログラムの先生方から授業参観、指導等でご支援を賜りました。また、他の学科の先生方、地域の日本語教師の方々、現地学生の方からも御協力を得ました。愛知教育大学国際交流センター事務局には派遣手続き等でお世話になり

ました。皆様にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。また、本稿をまとめるにあたっては、審査の方から有益な指摘や丁寧なコメントをいただきました。筆者の力不足から十分に活かすことができませんでしたが、この場を借りて感謝の意を表します。

注

- ¹ 本稿では、インターンシップとは、「現地での滞在研修全体」を指す場合に用いる。また、派遣前の事前指導、現地研修、事後指導を含めた全過程をインターン研修プログラム（研修プログラムと略す）という用語で表すことにする。また、「研修」という用語には、「指導」も含むと定義する。
- ² インターン派遣生は、「インターン学生」、インドネシアで学ぶ学生を「現地学生」と呼び、区別する。
- ³ 「(日本語教育)教育実習」とは、(日本語)教育に関わる実地研修を指す。「教壇実習」とは、授業をする形態の実習を指す。
- ⁴ 基金派遣専門家の業務は、基金海外センターにおける当該国の日本語教育アドバイザー型と、日本語教員養成で中核となる大学に赴任して学科の充実と自立に向けた支援を行う大学派遣型に大別される。
- ⁵ 本稿では、研修プログラムの開発と実践に焦点を絞り、インターン学生の振り返りの内容や研修の教育的効果については、別稿とする。
- ⁶ 基金の日本語パートナーズは、ASEAN諸国の中学・高校などに派遣され、現地日本語教員や生徒のパートナーとして、授業のアシスタントや日本文化の紹介を行う（国際交流基金アジアセンターのウェブサイトより）。インドネシアの東ジャワ州では、第1陣として2015年9月に10名が州内の高校に派遣された。

参考文献

- お茶の水女子大学 大学院日本語教育コース (2014) 『2013年度ニューサウスウェールズ大学 海外日本語教育実習報告書』
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/54747> (2015年12月12日参照)
- 才田いずみ (2005) 『平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書』https://www.jsps.go.jp/j-initiative/data/sinsa_hum/a003_jigo.pdf (2015年11月15日参照)
- 高崎三千代 (2015) 「地域や高校といっしょに日本語学習を推進しよう」世界の日本語教育の現場から (国際交流基金日本語専門家レポート) https://www.jpj.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/tounan_asia/indonesia/2015/report06.html (2015年11月10日参照)
- 「早稲田大学国際学術院の将来構想 2013年度進捗報告・2014年度計画」http://www.waseda.jp/sils/jp/about/Vision150_gsjal.html (2015年11月15日参照)
- 「日本インターンシップ学会」http://www.js-internship.jp/kenkyu_nenpou.html (2015年11月15日参照)

(2015年12月18日受理)

資料【表2：カレンダー】（→は同行者、指導者を表す）

週	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
1					○到着	○市のボランティア日本語教室の見学 ○オリエンテーション ○結婚式に出席 →コーディネーター	○オリエンテーション →コーディネーター
2	○副学長、学部長に表敬訪問 ○授業見学： 『初級表記』A先生 『中級読解』B先生	○授業見学： 『中級日本語』C先生 『中級日本語』D先生	○『外国語としてのインドネシア語』クラス見学 ○よさこい踊りクラブ見学	○実習 東ジャワフェアで日本総領事館のブースの見学	○学校での実習 ○カウンセリング →基金派遣専門家 ○結婚式に出席	○ホームステイ先と遠足 →ホームステイ先 ○高校教員会定例会の見学	○ホームステイ先と遠足 →ホームステイ先
3	○授業見学： 『初級表記』A先生 『中級読解』B先生	○授業見学： 『中級日本語』C先生 『中級日本語』D先生	休日 スラバヤ市内観光	○実習 社会学部の見学	○学校での実習 ○カウンセリング →基金派遣専門家	○歴史的史跡見学 ○一泊旅行 ○『田舎暮らしの体験』 →ホームステイ先	○歴史的史跡見学 ○一泊旅行 『田舎暮らしの体験』 →ホームステイ先
4	○授業見学： 『初級表記』A先生 『中級読解』B先生	○授業見学： 『中級日本語』C先生 『中級日本語』D先生 ○実習準備の相談 →基金派遣専門家	○インドネシア伝統音楽と楽器 →芸術学科	○実習	○学校での実習 ○教壇実習の相談 →基金派遣専門家	○大学文化祭 →日本語学生会	○大学文化祭 →日本語学生会
5	○実習準備の相談 →基金派遣専門家	○教壇実習 『中級日本語』D先生 ○振り返り1	○VDO 視聴法で振り返り ○簡単な発表会 ○会食 →日本語教育学科	○学生会とお別れ会	○帰国準備	○帰国	